

研究所だより

埼玉大学でのシンポジウム「もうひとつの就職セミナー」の企画を考えながら、『教育』2月号の特集「就職難と青年の未来」を読ませて頂きました。会員の乾先生が司会をされ座談会が組まれています。氷河期といわれる就職難の中で、希望しながら途中で脱落しあきらめさせられてしまう実態や就職活動を通じて「働くこと、学ぶこと」を改めて考える学生の姿などが紹介されています。山本陽子さんの「私たちの世代は高校、大学と受験の中で育ち、勝つ為には友人を蹴落とすこともしなければならなかった。めだつといじめるから、人と違うことはしてはいけない。こんな教育を受けてきた私たちだから、一人で悩み苦しんで、企業好みの人間になったり、あきらめたりするのではないか」という主張には、教育そのものを問い直す鋭い学生の感覚が示されているように感じます。新卒定期一括採用が崩れ終身雇用や年功賃金が標準でなくなるという現実を前に「大学教育の中に就職活動をどう位置付けるのか」従来見捨てられてきた問題が提起されています。同じ号に労働者協同組合で働く会員の菊地さんが「転職してきた20代の女性は、・・・自分たちの働き方について『ルールの上をいかに走るかではなく、ルールをつくることから自分たちでやる場所だ』・・・『みんなで一つのものをつくりあげるとところに喜びがある』と語っている。若い世代にとって協同組合で働くことは、会社で働く以上に自分を律すること、他人を思いやるが必要になり、創造性も必要となる。これらをお互いに学び合いながら働き、自己実現の場をつくれたら、と」自ら3年間かかかってきた労働者協同組合の実践報告をされています。是非読んで頂きたいと思います。

大阪の水谷利亮さんから「全国協同集會」に関する質問のはがきを頂きました。『住民と自治』1・2月号に「福祉多元主義の条件」と題する論文を書かれた方と気づき、出会いに驚いていま

す。サラモンの著作を引用しながら福祉公務労働の外部化を理論付ける労作で、現在日本労働者協同組合が取組んでいる「高齢者協同組合」を（名前こそ出ていないが）高く評価する内容を含んでいると注目していたからです。非営利協同の時代を展望する若手研究者との出会いをうれしく感じています。

熊本で「協同を考えるシンポジウム」が開かれました（2/3）。高齢者協同組合の設立宣言集を兼ねており、勢い参加者の顔ぶれ質問もそこに集中します。熊本学園大学の嵯峨先生がコーディネーターの全体会と3つの分科会が行われました。熊本ではすでに「ふくし生協」が10年の活動をしてきています。組合員も1700名（延べ）に達し、介護に携わるヘルパーは約50人、毎日50食の宅配給食も行なっているとのことでした。しかし、自治体はこういう実績を評価せずいまだに法人認可を認めません。ふくし生協は5月に設立する予定の高齢者協同組合に合流する方針を固めています。協同のネットワークが広がることを本当にうれしく思います。

高知県教組の山下先生に教育協同の活動について伺いする機会があり、地域とのつながりを考えた取組みが現実に動きつつあることを強く感じました。休眠中の専門学校村おこしへの活用が自治体とともに進められていることや2月に発足する高知中高生ゼミナールのことなど、機会をあらためてご報告頂こうと思っています。

労働者協同組合法の第3回プロジェクト会議（1/11）では、各論の詰めを3月末まで小委員会に別れて行なうことになりました。第4回基本研究会で池上惇先生に「労働者協同組合の公共性」について報告して頂きました（1/13）。内容は本号22頁に掲載。

（坂林 哲雄）